

ソール・ベロー『雨の王ヘンダソン』の 主人公は何を考えているのか ——小説の創造的解釈をめざして

植松靖夫

粗筋

Eugene Henderson は 55 歳、裕福で社会的地位も高く、体格にも恵まれているが、精神的には充実感が欠如していて、それが “I want, I want, I want” という内なる叫び声となって現われる。その声が何を欲しているのかを探して、アフリカに行く。

アフリカに着くと、Henderson は現地のガイド、Romilayu を雇い、Arnewi 族の村へと案内される。そこで村の指導者たちと仲良くなる。Arnewi 族が飲料水にしていた池にカエルが棲みつき、「不浄 (unclean)」と見なされて水が飲めなくなる。Henderson はカエルを追い出して Arnewi 族を救おうとするが、結局、カエルだけでなく池までも吹き飛ばして、悲惨な結末となる。

Henderson は Romilayu と共に Wariri 族の村へとおもむき、そこでマンマー (Mummah) の木製の巨大な女神像を持ち上げることに成功して、期せずして Wariri 族の雨の王 Sungo となる。すぐに地元生まれで西洋で教育を受けた王様 Dahfu と友情を結び、哲学的な議論を展開する。

Henderson は先代の王だった Dahfu の父の生まれ変わりとされるライオ

ソール・ベロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

ンを探すことになるが、ライオン狩りは失敗し、王は致命傷を負う。Dahfu が死ぬ直前に Henderson は雨の王が王座を告ぐことになるのだとわかる。王になどなりたくないし、国に帰りたいので、Henderson は Wariri 族の村を逃げ出す。

Henderson が本当に精神的な満足、魂の満足を覚えたのか、明確にはなっていないが、小説は楽観的で明るい調子で終わる。

1. 小説をどう読むか

- ・小説を読む際に何に留意したらいいか
- ・意味の鍵はどこにあるのか
- ・基本的な構成はどうなっているのか
- ・見かけの矛盾をどう解決するか



小説の構成と方法の理解

2. 小説のユニークな特徴



小説の世界と自分の体験との間を移動する

Saul Bellow の *Henderson the Rain King*

What made me take this trip to Africa? There is no quick explanation. Things got worse and worse and worse and pretty soon they were too complicated.

When I think of my condition at the age of fifty-five when I bought the ticket, all is grief. The facts begin to crowd me and soo I get a pressure in the

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

chest. A disorderly rush begins — my parents, my wives, my girls, my children, my farm, my animals, my habits, my money, my music lessons, my drunkenness, my prejudices, my brutality, my teeth, my face, my soul! I have to cry, “No, no, get abck, curse you, let me alone!” But how can they let me alone? They belong to me. They are mine. And they pile into me from all sides. It turns into chaos.

However, the world which I thought so mighty an oppressor has removed it wrath from me. But if I am to make sense to you people and explain why I went to Africa I must face up to the facts. I might as well start with the money. I am rich. From my old man I inherited three million dollars after taxes, but I thought myself a bum and had my reasons, the main reason being that I behaved like a bum. But privately when things got very bad I often looked into books to see whether I could find some helpful words, and one day I read, “The forgiveness of sins is perpetual and righteousness first is not required.” This impressed me so ddeply that I wsent around saying it to myself. But then I forgot which book it was. (3)

〔どうしてアフリカ旅行をすることになったのか。簡単に説明ができない。事情がどんどん悪くなっていて、手に負えないほど複雑になってしまった。〕

私が切符を買った 55 歳の頃を思い出してみると、なにもかもが愚痴の種になるようなことばかりだった。いろんなことがどっと私に押し寄せてきて、すぐに胸が押さえつけられるような感じがする。すべてがめちゃくちゃに——私の親、妻、女性の友人、子供、農場、動物、癖、金、音楽のレッスン、自分の酔態、偏見、自分の野蛮な行為、歯、顔、魂などが迫って来はじめる。私は思わず叫んでしまう。

「いやだ、いやだ。引っ込め、この野郎。ほっといてくれ！」しかし、ほっとしてくれるわけがない。なにしろ、それはすべて私のものなのだから。至る所から押しかけてきて、混乱状態になってしまうのだ。

ところが、強烈な迫害者だとばかり思っていた世の中が、その怒りを私に向けずにくれた。ただ、なぜアフリカに行ったかを説明しなければならぬとしたら、私は事実と向き合うしかない。まず、お金の話から始めた方がいいかもしれない。私は金に不自由はしていない。税抜きで 300 万ドルを父親から相続した。しかし、私は自分を浮浪者だと思ったし、それは無理もないことで、なにしろ自分で浮浪者のような恰好をしていたのだから。ところが、状況がひどく悪化してきたときに、何か助けになるも

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

のではないかと、密かに色々な本に目を通してみた。するとある日、つぎのような言葉にでくわした。

「罪の赦しは永遠のものであり、正しき行動が最初に要求されるのではない」

この言葉に感動したので、わたしはそれをつぶやきながら歩き回った。だが、そのうちに、それがどの本に出ていたかを忘れてしまった。」

文学の大きなメリットは私たち自身の体験とは無縁な人たちの生活の中に入っていけること。

Henderson との出会いを活用するには、何に注意すればいいのか。とりあえず作中人物を評価したら（今、Henderson に対して行なったように）、彼がどんな話題を選ぶかに注目しなければならない。

Henderson の場合は、金や年齢（55 歳）、人生の混乱状態についての認識、人生の意味の探求（「何か助けになるものはないかと、密かに色々な本に目を通してみた」）、聖書の語句の中に慰めを見出そうとする態度（「罪の赦しは永遠のものであり、正しき行動が最初に要求されるのではない」）などである。

これらは Henderson の個性や人生観の手がかりになるだけでなく、この小説の意味を解く鍵にもなる。

3. 分析的批評の秘訣

作品の異常な面とか印象的な面に特別な注意を向けなければならない。

⇒死のつながりについては短い描写がいくつも出てくるが、この時点では私たちが理解できることは何もない。



ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

異常な事柄，心を打つ場面などについて取ってきたメモが役に立つことになる

批評は同時に創造活動でもあり，基本原理を見出すために科学者のように，自分の経験や知識を自由に利用する必要もある。

大抵の優れた小説は多義性（ambiguity）をもっているものであり，言語と人間の行動は様々な解釈が可能なものなので，既に批評家たちが完全に小説を分析し終えていることはありえないし，ある小説がすべての面からすべて読みとられてしまったということもありえない。すぐれた小説は探れば探るほど，ますます大きな，解釈上の豊かさを生み出すものであり，優れた小説家は二次的で場違いに見える小さな事件・出来事を使って，作品の意味をふくらませようとしているものなのだ。

作者の意図ばかりにとられる必要はない。小説を読むということは創造的な解釈の仕事であり，そこに発見があるのだから。

資 料 編

- I. Granville Hicks. "The Search for Salvation," *The Critical Response to Saul Bellow*. Ed. Gerhard Bach. Westport, CT: Greenwood, 1995: 100-107. Print.

Henderson the Rain King は冒険小説で重要な意味を持っている。他の Bellow の作品同様，必死に自分を見出そう，自分を変えよう（transform）とする男の話であるが，Henderson の探求（quest）は，見知らぬロマン

ソール・ベロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

ティックな場所へと連れて行く。

Bellow はこれまでも奇怪な人物を登場させてきたが、Henderson は中でも突飛な行動に走る (extravagant) 人物だ。55 歳で、six-foot four inches (1 m 90 cm) の身長 of 巨漢で、金持ちで家柄も良いが、人生を無駄に過ごしてきたという。何かに突き動かされ、駆り立てられているのだが、何に駆り立てられ、どこへと駆り立てられているのか自分でも分からない。

どこかにいかなければと思って、偶々アフリカへ行く。信頼できるガイドだけ連れて、アーニューイ Arnewi 族という大人しい種族に会い、気に入るが、彼らの役に立とうとして、災難をもたらし、激しく後悔する。

この現代の Gulliver はさらにその後はワリリ Wariri 族を訪ね、その王 Dahfu と親しくなる。王は医学の勉強をしたことがあり、英語を話せる。Henderson は怪力を発揮して巨大な像を持ち上げたために、雨乞いの儀式で重要な役割を担うことになる。そして雨が降ったために、雨の王になる。

これだけでも変な話だが、さらに変なのは王の Dahfu が一種のライオン信仰へと、気乗りのしない Henderson を引きずりこもうとする。二人は人間の性質と運命について語り合う。そして、山場となるのは、ワリリ族の危険な儀式のしきたりに則って行なわれるライオン狩りで、たぶん策略により王は死に、Henderson は Dahfu の後継者にされないように逃走する。Henderson はライオンの子を連れて、自分の探し求めたいものを見つけたとの確信をもってアメリカに帰る。

自分の性質について誠実に思いを巡らし、しかしその性質を変えることができない人間の苦悩を Bellow ほど見事に表現した作家はいない。(101)

II. Donald W. Markos. "Life Against Death in *Henderson the Rain King*," *The Critical Response to Saul Bellow*. Ed. Gerhard Bach. Westport, CT:

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

Greenwood, 1995 : 107-119. Print.

Henderson という人物のなかに、再生への潜在的な活力だけでなく、疎外の破壊的な兆候も見られる。Bellow は Henderson を生身の人間以上に大きく見せ、全世代のアメリカ人の恐怖と希望の多くを体現させている。(108-09)

Henderson はアメリカ、つまり変化を必要としているアメリカの象徴のように論じられることも多い。(109)

最初の4章では Henderson のアメリカでの激動の生活を描き、アフリカ行きを思い立った心境を説明しようとしている。(109)

二度結婚したが、再婚した妻ともうまくいかず、子供たちの面倒もみない。借家人と喧嘩をして、ペットを撃ち殺そうとしたり、騎兵隊の兵士と口論になったり、自殺するぞと脅したり。自分の怒鳴った声がある老女の心臓麻痺を引き起こしたと確信していて、それがアフリカ行きを思い立った直接の理由だ。(109)

Henderson は激しい、方向の定まらないエネルギーに突き動かされて、他人とも自分とも衝突ばかりしているが、それでも解放 (release) を求めている。彼は自分の土地に立ちながら「草の下の大地には、死骸もいっぱい埋まって」いて、「死骸も腐葉土と化して、草の成長を助ける」(29: 訳43) と考えていた時のことを思いだす。草と花に囲まれていても Henderson が幸せではないのは、まだ自分自身が必要な transformation を実現できてないからだ。そして、彼は再生 (rebirth) にイメージに大いに興奮する。ある科学雑誌で40年か50年に一度開花する砂漠の花で、その種は人工的に水に浸けてもダメで、雨水の自然な状況の中で発芽するという記事を読んで強い感銘を受ける。種子には独自の有機的な成長力があり、人間

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

にも同様の力があるにちがいない。再生 (renewal) の衝動がこの小説の中心にある。

Henderson the Rain King では、価値のない宇宙で畏にかかっているもしくは漂流している人間という独善的なモダニストの人間観と、もう一つ有機的な宇宙の中で、成長の原理を共有して宇宙と一体化しているというロマンティックな人間観が展開されている。

Henderson が “I want. I want.” という声を聞くように、変化を求める力は内側から起こる。アフリカへの旅は失われた状況への回帰を目指すものであり、Conrad や Hemingway 以来の、人間が自分についての真実を発見する場所である。この小説の意味は、Arnewi 族と Wariri 族とその leaders の象徴的な理解にかかっている。(110)

※ Henderson が最初に出会う the Arnewi は大人しくて愛すべき種族で、従って「不運 (unlucky)」である。運命 (旱魃, 飲料水を汚すカエル) を受け入れ、自ら改善しようと積極的に行動することが出来ない。一方、Henderson は熱意と善意に溢れ、彼らのために行動しようとする。しかし、自らをわかっていないために、衝動的な行動により、役に立つよりも、破壊することになる。火薬と懐中電灯で作った爆弾はカエルを殺すだけでなく、貯水池をも破壊してしまう。現代人が科学技術に逆襲されていることを示している。

Wariri 族は攻撃的で、好戦的で、敵意があり、残酷。何かしら「死」と関わりのある種族で、村の外れにぶら下がっている死体、Henderson の小屋に置かれた死体、魔女らしい女の首など、攻撃の本能だけでなく死の本能も表わしている。様々な大きさの神の木像があり、「空気、山、火、植物、牛、幸福、病気、霊、誕生と死」(181; 訳 254) を支配する神々の像だった。要するに、それは生命の神々で、彼らがその木像を乱暴に扱うのは、life

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

に対する *resentment* の表われ。この憤りは Arnewi 族の受身の姿勢と対極をなしている。*grun-tu-molani* 即ち *love of life* をもっている Henderson はその光景に慄然とし、「神々に対して腹を立てる根拠は十分認めはするものの、これではあまりに安っぽい振る舞いとしか見えない」（訳 255）と思う。

しかし、*life* に対する Wariri 族の姿勢はのちに登場する儀式に表われる。その儀式では、女たちが狂ったように踊りながら短い鞭を振り回し、木製の神々の像に向かって行き、雨の王となった Henderson をもこの狂乱に巻き込んでいく。

Arnewi 族と Wariri 族が人間の相反する二つの本能を示しているとしたら、完全な人間というのは、この二つの傾向が調和していて、それが協働している人間だと考えられる。事実、Dahfu は Henderson に二つの種族はかつては一つの種族だったが「運の問題で二つに分かれた」（166：訳 233）と言われる。現在もこの種族は昔一緒だった痕跡を残しているが、それよりもさらに両種族の長、Queen Willatale と King Dahfu は人間の力（*human forces*）の完全な調和（*harmonization*）を体現していて、Henderson が達成しなければならないバランスのとれた状態（*equilibrium*）の見本となっている。（111）

Dahfu は、人間は *imagination* の力で自分を変えることが出来ると断言する。Emerson が人間の魂を大きな力と靈感の源である the Oversoul と結びつけて考えたように、Dahfu は人間の想像力を自然界における創造的な生命力を伝えるものと見なしている。想像力によって人間は現在の自分を超える、さらに優れた存在へと変化する力を得ることができるのである。

理想は Dahfu の言葉よりもその人本人によく表わされている。Dahfu の智慧は文明人にはよく見えなくなっている源から出てきているように見え

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

る。Henderson は、科学的関心を持ちながら原始的な迷信を信じているらしい Dahfu の姿に当惑するが、この組合せは Henderson の中では分裂している理性と本能の結合を意味している。

Dahfu は Henderson に死の恐怖を乗り越えさせようとし、Becoming の不安な状態から Being の静穏な状態へと導こうとする。「最も強力な食欲の持ち主は、また必ずや現実を最も疑う人なのです」(232: 訳 325) と Henderson に言う Dahfu の言うことは正しい。Dahfu 王は、Henderson は「すぐに避けるタイプ (avoider)」だから、ライオンは「避けられない」(260: 訳 365) のでライオンが彼を変えてくれるという。

Henderson に自分の性質を十分に理解させるため、Dahfu は宮殿の下のライオンの小屋で実験を行なうことにする。実験は Henderson をライオンの前に連れて行き、ライオンの真似をさせるのである。四つん這いになって吠えさせるのだ。

Henderson は Dahfu のいう、選ばれた「気高い自我」を目指して意識的に変身するという考え方を受け入れる。

「古い自我を克服しようとしているのだ。そうだ、そのためには、何か新しい基準を受け入れねばならぬ。強いてある役割を演ずることさえ、やらねばならぬ。身につくまでは、一時は、みずからを欺く必要さえあるかもしれない」(297-98: 訳 422-23)。ただし、Henderson の目指したい意識的変身の方向は、動物的ではなく人間的なものだった。

しかし、ライオンは Henderson に確かに影響を与える。ただしそれは Dahfu が小屋で飼っているペットのライオンではなく、王がつかまえなければならぬずっと大きくて獠猛なライオンだった。Henderson に変化が起こるのは、そのライオンが近づいて来るのを王と一緒に待っていた時だ。このライオンの唸り声が「意識の入り口を」叩き、Henderson はライオン

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

の「しわだらけの、引き締まった顔」(307: 訳 436)の中に“darkness of murder” (訳されていない)を見た。「この動物の唸り声は死の声だった」(307) ライオンの唸り声は Henderson が現実に対して抱いていたかもしれない幻想 (illusions) を貫き通した。「非現実だ、非現実だ、これが平穏とはいかないが永遠の生活に対するほくなり計画だった。しかし、これもライオンの一吠えによって、消し飛んでしまった」(307: 訳 436-7)

Dahfu と一緒に待ちながら Henderson は人間もその一部である自然界に属する死と野蛮の現実を理解する。

この出来事の結果は、Henderson にとっては覚醒させるほどのものであり、Dahfu にとっては死を意味する。

Dahfu は完璧に自然な人間の姿をしていて、自然に近い人間であらゆる葛藤から解放されている人間だったが、Henderson はそのような自然な完璧さと満足は自分には十分ではないとっていて、彼が必要とするのはもっと人間的な状態なのだ。

王の死後、Henderson には今まで求めていた「変化」が起こる。(「もう眠りは破られ、ほんとうの自分に立ち帰れた」328: 訳 467)そして、彼は「なぜあらゆる人間が、このために苦しまなければならないのか。本来の自分に帰ってことぐらい、むずかしいことはまたとないからね。ほくらは、その代わりに、いろんな傷を身に作っていく」(328: 訳 467)という。

小説の最後で Henderson は飛行機がニューファンドランドで給油している間、北極の雪の上で飛び跳ねることによって、新たな存在感を認識する。

この小説の要点はアフリカから戻らなければならないということだ。文明社会へと戻る必要がある。

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

III. Ellen Pifer. *Saul Bellow : Against the Grain*. Philadelphia : Univ. of Pennsylvania Press, 1990. Print.

Chapter 6 “Beyond History and Geography : *Henderson the Rain King*”

道化のような役回りをしながら、Henderson は自分の旅の哲学的な性質 (metaphysical nature) について匂わせる。「ぼくとしては、地理の本にのっていない土地に乗りこんだという考えを捨てきれなかった。いや、地理学なんかを気にかけてるわけじゃない。地理学なんてある土地の位置さえきめれば、それで万事おしまいといった、生意気な考え方にすぎんのだから」(55: 訳)

Henderson にとってアフリカの奥地に行くことは、「過去の中に——歴史とか何とかいうまがい物じゃない、ほんとうの過去の中にはいりこむ」(46; 訳 67) ことを意味していた。

※ Henderson が発見する「未知の世界 (*terra incognita*) は地図上には見つからない世界であり、その異国は従来の時間のカテゴリーを超えていて、空間の座標に留まらない。Henderson にとって歴史と地理の向こうにあるのはアフリカそのものではなく、死の世界から解放された、現実の世界、ある精神状態なのだ。(96)

小説の最初のページで語り手としての Henderson は過去の自分と現在の自分の比較している。「アフリカ行き切符を買った 55 歳の時の俺の状況は、何もかもが悩みのタネだった」と言い、すぐに「でもあんなに圧迫感があると思った世界が、もう俺に怒りをぶつけてくるのが無くなってしまった」と付け加える。(98)

アフリカ旅行を経て、Henderson がもう世界から圧迫されなくなったのは、「今の自分は、前に自分だと思っていた人間とはちがう」(I'm not

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

what I thought I was. 328) からだ。かつては Lily のように「人を変える愛情の力 (love's transforming power)」を信じるものを莫迦にしていた男が、まさにその力によって変えられるのである。

アフリカでは Arnewi 族と Wariri 族を相手に試練を経験するが、ライオンの Atti との試練が死という「生の現実 (raw fact)」と直接、接することになる。しかし、この経験は逆説的に、死の彼方にある現実へと目覚めさせてくれて、それは愛の絶対的な力により支えられている現実だった。(98)

魂の眠りをついに破る力となるのが、Lily だけでなく他人——自分の子供たち、Romilayu, Dahfu——へと、さらには地球そのもの、つまり一人一人の人間 (mortal) を死へと委ねるこの変わりやすい世界へと向けられる Henderson の見出された愛なのである。あらゆる現象に死の宣告を読みとっていた男が、不死 (immortality) の性質を理解する人間へと変貌する。Henderson の意識の変化を理解するためには、まず、アフリカへ行く以前の Henderson の話に目を向けなければならない。この出発点から「地理を超えた」彼の旅の距離が正確に理解できる。

旅に出る前の Henderson には「とらわれの身」を示す怒りと敵意が見られる。彼の反社会的な爆発と衝動的な残忍な行為は「mortality」自体への憤激から生じている。彼は死に取り憑かれていて、人生における意味も価値も目的も否定するような人生観の持ち主で、偶像崇拜者の常で、自分のもっとも恐れているもの——死——を崇拜するようになる。King Dahfu がのちに Henderson に言ったように、「したくないことのために自殺というのは、いちばん多い原因ですね」(233; 訳 328)

Henderson は第2次世界大戦が終わると軍隊をやめて、豚の飼育に精を

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

出す。この仕事の象徴的な意味について、語り手 Henderson はこういう。“When I came back from the war it was with the thought of becoming a pig farmer, which maybe illustrates what I thought of life in general.”「戦争からもどってきたときは、豚の飼育をやりだすつもりで、これが、当時のぼくの人生観を物語っているかもしれない」(20; 訳 29) ずっとのちに彼はこう認めている。“The hogs were my defiance. I was telling the world that it was a pig.”「豚を飼ったのは、ぼくなりの反抗だ。世界に向かって、お前こそ豚じゃないかと言おうとしたのだ」(287-88; 訳 407)

しかし、この内的な変貌が起こる前に、Henderson の精神は自身の肉体と世界の肉体に対して怒り続ける。そして怒りを露わにするたびに、怒りを解放するのではなく、さらなる怒りを募らせる。“Wrath increased with wrath.”「怒りは一層の怒りをよぶばかり」(23; 訳 35)

裕福で体力もあり体格も良い Henderson は物質的な世界では何不自由ない地位に君臨していられたが、それがしかし延々と続く苦悩 (torment) の原因ともなった。

コネチカットの農場で“the sun is shining on the pines and the air has a spice of cold and stings your lungs with pleasure.”「松の木に日が照り、空気にひんやりした味わいがある、喜びが胸にしみわたる」(28; 訳 43) が、“Beneath this grass the earth may be filled with carcasses . . . they have become humus and the grass is thriving.”「草の下の大地には、死骸もいっぱい埋まっていて、死骸も腐植土と化して草の成長を助ける」(28-29; 訳 43) ことを知っている。

アフリカで平和な Arnewi 族の中に入ると、女王の Willatale が「人生の智慧 (wisdom of life)」に根ざしたまったく別の救い (salvation) の方法を教えてくれるのではないかと感じる。“I thought that she could open her

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

hand and show me the germ, the true cipher.”「彼女が手を開くと、謎解きの鍵が、万物の芽がぱっと現われ出る、そうぼくは考えた」(100；訳 141)

しかし、Henderson はこの部族の水源地にいるカエルたちを追い払おうとして、自ら救済のチャンスを潰してしまう。

Henderson がカエルを吹き飛ばそうとしたのは、智慧を授けてくれた女王 Willatale への感謝の気持ちもあったことは確かだ。

女王は“Grun-tu-molani. Man want to live.”「グラン・チュ・モラニ、人間は生きたいということだ」(85；訳 120) と教えるが、Henderson の理解は浅く、“God will reward her, tell her, for saying it to me. I’ll reward her myself. I’ll annihilate and blast those frogs clear out of that cistern, sky-high.”「こんないい言葉を教えてくださって、神も認め、報い給わんことを。いや、女王には、ぼく自身の手でお報いしたい。あの井戸の蛙は、一匹残らず空中に吹っ飛ばして皆殺しにしてくれるぞ」(85)

この惨劇が起こる前、Henderson の「感謝の行為 (act of gratitude)」の裏にある曖昧な動機が既に示唆されている。カエルを吹き飛ばす爆弾を作りながら、Henderson は自分の「力」にうきうきしている。“I lay grinning at the surprise those frogs had coming, and also somewhat at myself, because . . . I went so far as to imagine that the queen would elevate me to a position equal to her own.”

「蛙の奴ら、びっくりしやがるぞと、思わずぼくそ笑んで、かなり得意な気持ちになった。(中略) 女王はきっとぼくを女王なみの地位に引き上げようとするだろうなどとまで思った。94；訳 134」Henderson は“all the know-how I had”「習い覚えたコツと技術」(102) をすべて利用しようし、技術を「悟り (enlightenment)」と思い違える。蛙を追い払って水不足の問題を解決しようとするのだが、そこには技術による解決への見当外れな

信頼が見られ、Henderson は「救い (salvation)」とは何なのかについて根本的に誤解しているのだ。無意識のうちに死を信仰していて、Henderson は“murder technique” (66: 殺人の手) によって「救い」を実現させようとする。過去を振り返りながら、Henderson はこの時矛盾する衝動に駆られていることに気づき、読者に向かってこう心の内を明かす。“‘Poor little bastards’ was what I said [about the frogs], but in actual fact I was gloating. . . . My heart was already fattening in anticipation of their death. We hate death, we fear death, but when you get right down to cases, there’s nothing like it. . . . I hungered to let fall the ultimate violence on these creatures in the cistern.” 「哀れなこいつらめ」と言い出したものの、実は内心ほくそ笑んでいたのだ。(中略) 彼らの死を期待して、ほくの心は舌なめずりを始めていた。ほくらは一応死を憎み、死を恐れてはいる。しかし、いざ底まで突きつめてみると、そんなもんじゃない。(中略) 池の中の生き物に、死の暴力を加えんという渴望に身を燃やしている」(89; 訳 125-26)

Arnewi 族に悲劇をもたらして初めて、Henderson は自分の「危険な know-how」と西洋の技術——オーストリア製のライター、H & H マグナム・ライフル、それに自身が被っているヘルメット——が、Arnewi 族の生活様式を支配している複雑な関係を歪める力を彼に与えることになるのではないかと考える。しかし、こんなふう to 思いをめぐらすのは長続きしない。ひとしきり恥ずかしさと罪悪感を味わっても、すぐに自分の失敗を現代の know-how を実践する者は誰でも経験する失敗であると理屈をつける。“Is there a surgeon anywhere who doesn’t lose a patient once in a while?” 「外科医なら時々患者を死なせんわけにはいかないじゃないか」(115; 訳 161)。後に、交戦的で手ごわい Wariri 族の中に入ると、Henderson は様々な文明の利器によって彼らに印象づけようとする。攻撃的な Wariri 族は、

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

独自の（銃も含めて）「危険な know-how」を多数持っているために、Henderson が見せるライター、拡大鏡などを無視する。しかし、Henderson は西洋の進んだ know-how がもたらす安心感（security）を執拗に過大評価する。たとえば、Wariri 族は領土内では他国人の武器の携行を許さない（132；訳 185）と言われ、武器などを取り上げられると、「ああいう高級な設備をあいつらはよく知らない」（132）のではないかと思ったりする。

Henderson の衝動的な行動は、ambition と pride と longing for salvation が混じり合って生まれている（102）。いかにも Henderson らしい性急さで、Wariri 族の女神像マンマーを持ち上げる決心をした時、彼の野心と Arnewi 族の中での彼の運命的な行動の関係が明確になる。“I burned to go out there and do it. Craving to show what was in me, burning like that bush I had set afire with my Austrian lighter for the Arnewi children.”「〔ぼくにはきつとやれると思うと、うちなる野心があふれ、〕燃え上がり、出て行って、やりたくてならなくなった。目に物を見せてやるのだと、オーストリア製のライターで、アーニューイ族の子供の前で、火をつけて見せた藪みたいに、ぼくの野心は燃えだした」（185；訳 260）技術と精神的な解放（spiritual salvation）を混同しているところから、彼には悟り（enlightenment）が必要であることが滑稽にも際立ってくる。

マンマー像を持ち上げるのに成功すると、Henderson は Wariri 族の the Sungo つまり Rain King になる。あとでわかることだが、毎年、その像を持ち上げるのが Rain King の義務であり、失敗すると殺されるのである。

※ Henderson が勇氣と優れた伎倆を見せつけ続けるうちに、またしても「死滅という厳然たる事実（raw-fact of extinction）」と向き合うことになるのは偶然ではない。人間の考え出した技術や方法が、人間を支配する

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

「死という厳然たる事実」に逆らい、超越することは考えられないことだ。Henderson が *salvation* —— 死に支配された存在から解放されること —— を達成するためには、現実に対する味方を根本から変えなければならない。

Wariri 族の中に入って、Henderson は世界が “an organism, a mental thing, amid whose cells I had been wandering.” 「別個の有機体、心をそなえた生き物で、その細胞の間をこちらがうろつてきた」(156; 訳 217) ことに気づく。そういう認識を Henderson は “peculiarity of my mental condition” 「ぼくの心的状態の奇妙さ」(157) のせいにする。しかし、自分の認識する世界が *mental construct* なのだから、自分が支配し命令を出せると考えているのは間違いだ。“From mind the impetus came and through mind my course was set, and therefore nothing on earth could really surprise me.” 「心からの衝動が生じ、心を通して、ぼくの行く道が定められる、そこで、心(しん)からぼくを驚かすものは、この世に何ひとつない」(157)

ところがその直後、彼が入り込んだ「未知の世界 *terra incognita*」はその思い上がりを打ち砕くことになる。Wariri 族の儀式が行なわれている時に King Dahfu の隣に坐った Henderson は司祭の緑色の古いナイフによってある男の胸が切りつけられ突き刺されていくのを見て、「心の底を、まるでトンネルでもくぐるように、強い衝撃が突き抜ける —— 下を通る汽車から、大きな建物に地響きして伝わってゆくような衝撃」(172) を覚える。こうして Henderson の認識が変化させられていく。

Henderson の「気づき (*discovery*)」は、あの蛙を攻撃して敗北感を味わった Arnewi 族との接触から始まっている。そして、Wariri 族との体験により、知識や技術 (*knowledge and expertise*) への過信が打ち碎かれる。たとえば、Wariri 族が雨乞いの踊りの準備をしていると、Henderson は Dahfu と「雨は降らない」ほうに賭ける。Dahfu 王に向かって太陽が照っているし、空

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

には雲一つ無いと言い放つ。王はその事実は認識した上で、reality とは神秘的で予想を覆すものだと Henderson に応え、見かけに騙されやすいのでは無いかとやんわりとたしなめる。

結局、Henderson の予想は裏切られ、儀式が終わる時に空は雲に覆われ雨が降り出す。しかし、既にその前に Henderson の科学を信奉する姿勢は皮肉にも自らの性急な行動によって否定されてしまう。つまり、儀式が始まると、Henderson は一か八か Mummah 像を持ち上げてみようと思ひ、待ちきれなくなる。Wariri 族によると、雨を降らせるにはこの女神像を持ち上げるといふ難題をクリアしなければならないのだという。自分の腕力を見せたくて仕方がない Henderson は初め莫迦にしていた儀式に自ら参加することになるのだ。

いよいよ女神像を持ち上げようと力を入れると、これまでの認識が大きく崩れてゆく。どうしても持ち上げたいと必死になると、突然、像は単なる物体ではなく、生きた老女となり、「生き物であり、偶像などではない。ぼくらは、互いに挑戦し、挑戦される立場だが、しかも親しいもの同士だ」(192)

こうして Henderson は見事に女神像を持ち上げる。この儀式に参加して、彼は未知の次元に入り込む。彼の勝利は「技術 (technique)」によるのではなく、二者間の相互関係 (interrelationship) がもたらしたもの。

※いわば Dahfu 王に導かれて、Henderson は精神的に目覚め、世界は敵対するものではなく、親密なものであり、生きているものだと認識するようになる。

ライオンの Atti がいる檻の中に入るように Dahfu は Henderson に促す。「ライオンを吸収する (absorbing lion into himself)」ことによって、恐怖に駆られることがなくなるのだと Dahfu が言う。※恐怖がなくなると、「そ

ソール・ペロー『雨の王ヘンダソン』の主人公は何を考えているのか

の代わりに美が姿を現わす。完璧な愛についても同じことが言えますね」(262) Henderson が恐怖と立ち向かうのは、Dahfu を好きで尊敬しているからであり、だから Dahfu の友情を失いたくなくて、ライオンの檻の中にも入っていくのである。この避けられない状況に対峙して、彼は徐々にライオンとの関係を構築する。ライオンとの試練を通して Henderson は精神的な解放を獲得する。雨乞いの儀式の時も、女神像への認識が変化して、「生きた女性」として持ち上げることができたのも、Henderson の愛情の力のお蔭だ。このように Henderson が精神的に目覚めるためには愛情が鍵となっている。

世界が敵ではなく親密な存在であることこそ Henderson が探し当てた真理であり、死の宇宙の束縛からの解放をもたらしてくれる。小説の最後のほうで、Henderson は “the universe itself being put into us, it calls out for sope. The eternal is bounded onto us.” 「ぼくらの中には、宇宙そのものが秘められているのだから、当然、広い舞台を求めるのだ。永遠なるものを内に預かっているんだ」(318)

死滅を恐れる気持もなくなるのは、自分が永続する全体の一部であるとの体験をしたためであり、この永続する宇宙と自分は愛によってつながっていることに Henderson は気づく。この世界に繋いでいる (binds) ものが、同時に彼を解放してくる。恐怖や死に束縛されないように解放してくれる。